

<今回>276回目 2020年6月26日(金)15時~18時 602号室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p154 中国風名称への転化 より

<前回>275回目(20-2-14) 出席者 8名

資料(20-02-14-1)前回のまとめ(清水)

ー2)出雲風土記(清水)

ー3)「宋書」夷蛮より百濟伝(大墨)

A報告 今日から新しく石橋慶二氏が参加されることになった。建築業界に居られた。清水と同年齢(昭和14年)である。今日は時間がないので次回自己紹介をしていただく。

B資料ー2)出雲国風土記の冒頭の原文には今まで「宮」の文字がない。専門書でも原文改定されたままである。注記、解説の類もない。その代り「山西」の文字である。2005年初めて原文通りの「宮」の文字が書かれた本(山川出版社、沖森卓也ほか3名の連名の著)を今回再入手したので本と共に紹介した。宮と言えば近畿天皇家しかないという観念から江戸時代の荷田春満の訂正以来、注釈なく原文改定していた見本として示した。

ー3)今回読む個所に関連するとして大墨氏が用意したもの{宋書}巻97列伝第57東夷より百濟伝。読み下しと漢字原文

懇親会8名 津多屋17887円(2000・8) ー1887円

C 読書 p148 なぜ中国風の王名か

2倍年暦はどこで終わるかは前回読書だけに終わっていたので、そこからまとめる。

1)2倍年暦は継体で終わっている。理由①記は43歳。紀では82歳(約半分、3年のずれを考慮すれば42.5歳に相当する)。②推古治世は記紀とも36,37年とほぼ同じ。共通の年暦計算に立っている。

2)倭王武の上表文は昇明2年(478年)で雄略とは重ならない。雄略は(456年~479年)。B表の元嘉20年は大墨氏指摘の通り443年が正しい。(442年の本が間違い)B表はA表(日本書紀継体末年を531年として2倍年暦で縮小して作成した表)では昇明2年は雄略の治世と14年も離れてしまう。

3)なぜ中国風の王名か。倭国は日本風に名乗っていたが中国側の漢字に表記する時に勝手に1字名にしたと仮定するという論理。去来→讚(訓を訛る) 瑞齒別→珍(訛りて、似ている) 雄朝津間→津→濟(ミス、転訛) または津間を「妻」と書き、音読みして「さい」と読む説。

4)恣意的な原文改定 夷蛮の王名を中国風1字名称に書き換える手法は本当にあったかを宋書夷蛮伝から4例掲載、南齊書、梁書から5例掲載。そのような事例は全くないことを示した。資料3の大墨氏の資料を紹介していただく。〇〇將軍名について同じ名前が繰り返されているが行〇〇將軍は百濟王が仮に任命したのを宋側が改めて正式に任命したことを示したもの。江戸時代の松下見林以来の明治、大正、昭和の三代を通じて累々と積み重ねられてきた不毛を通り越して滑稽な議論を古代史学会はまじめにしていた。それでも最後の倭王武は雄略としている。(稻荷山古墳出土の鉄剣銘による)

次回日程 20-3-13(金) 15時から18時 305号室 以下6月まで新型コロナウイルスで閉館

ー3-27(金) 15時から18時 602号室

ー4-6(月) 15時から18時 1501号室